

他者性との接触に対する価値意識 ーグリーン・ツーリズム農家B1へのインタビュー調査より

Valuing Contacts with Otherness: Analysis of Interview Data with Agritourism Farmer B1

牲川 波都季
Hazuki Segawa

This paper analyzes the results of interview surveys conducted on an agritourism farmer B1 and clarifies what kinds of recognition of otherness B1 has had to continue accepting others in the tourism. As a result of analysis, it was found that B1 recognized as follows: 1) Acceptance of foreigners was interesting, 2) Degree of difficulty in accepting others in the tourism varied according to school stage, 3) Difficulty of acceptance of foreigners could be overcome by utilizing farmers' experience. However, B1 did not recognize the acceptance of foreigners as having special significance compared to other acceptance. This is because the acceptance of foreigners is just one element out of many that make up her well-being.

キーワード：他者認識、外国人受入政策、複言語・複文化主義、
民主制文化のための能力、価値意識

Key Words : Recognition of Otherness, Immigration Policy, Plurilingualism/pluriculturalism,
Competences for Democratic Culture, Values

1. はじめに

日本在住の外国人数は2015年末に過去最高となり、2019年末まで増加の一途をたどってきた。2020年以降しばらくは新型コロナウイルス感染症流行による一時的減少も予想されるが、少子高齢化に伴う外国人受け入れ政策が進められていることから、やがて再び増加していくものと考えられる。

こうした外国人の増加は特に近年顕著であるが、1990年の改正入管法の施行以降、日系南米人のコミュニティが生まれるなど、外国人の存在はすでに各地で身近になっていた。しかし、日系ブ

ラジル人の集住地域として有名な群馬県邑楽郡大泉町において、在住外国人側は日本人との交流に前向きな姿勢をもっているものの、日本人住民側は在住外国人との交流にネガティブな意識をもつもののほうが多く、その傾向は行政が「共生」への取り組みを始めて以降も変わらず続いているとの指摘もある(藤原、2019、p.195)。むしろ2000年代後半には、ヘイトスピーチに代表される排外主義運動が起こっており(樋口、2014、p.10)、日本社会に外国人とのかかわりを肯定的にとらえる意識が十分に広まっているとは言い難い。

この問題に対する有効な方策の一つとして、

学校教育での意識形成が挙げられる。これについては欧州評議会が、複言語・複文化能力や民主制文化のための能力といった目標と実現ツールを教育政策として提案してきており(Council of Europe、2001、2007、2016、2018)、日本の教育政策も参照可能である¹。また、日本で進められている、小学校段階からの英語教育や、高等教育機関でのグローバル人材育成関連事業も、たとえば後者の一つは「高度で豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を身につけ」させることを目的とする(文部科学省、2012、p.1)など、異質な文化とかわるための能力の習得機会になりうる。しかし、小学校での英語教育は外国人と友人になりたいなどの異文化理解の向上にはつながっていないという指摘(寺沢、2018、p.65)や、グローバル人材育成関連事業の恩恵を受けられる学生は全体のごく一部に過ぎないという指摘もある(吉田、2015、pp.208-209)。またこうした教育政策では外国語の中でも英語に重点が置かれているが、現状では、日本在住外国人の中で英語での意思疎通が可能な者はごくわずかであり、英語以外の在住外国人の第1言語を学習した経験のある日本人もまた少ない(牲川、印刷中)。日本語に関しても、たとえば2019年4月に新設された在留資格「特定技能1号」を取得するための日本語能力要件は低く、来日後の日本語教育支援の体制も十分には整備されていない(牲川、2019、pp.147-150、牲川、印刷中)。今後は意思疎通のための日本語能力をもたない外国人が身近に増えていくことが予想される。

こうした外国人が日本で生活を始めるとき、直接のかかわりをもつようになるのは、すでに成人し社会生活を営んでいる日本人が大半であろう。しかしそうした一般の日本人が、欧州評議会や日

本政府の進める教育施策を今後受ける機会があるとは考えにくい。英語であれば多くの日本人が一度は学習経験をもっており、近年の政策も英語教育を推進しているとはいえ、地域社会で接する外国人が、必ずしも意思疎通可能な英語能力をもっているとは限らない。日本語能力も同様である。ことばによる意思疎通が難しい場合、そうした外国人とかかわろうとする意欲はなおさらもちにくいであろう。

意思疎通のための媒介語運用能力が互いに十分でなく、外国人とのかかわりへの肯定的意識も広がっていない現状で、日本人は外国人と身近に暮らし始めようとしている。各地に居住する外国人が急増すれば、そこで外国人と接触することになる日本人の数も場も増え、新たな教育機会を一斉に提供することは困難になる。そこで本研究では、教育機会を得難い一般の日本人も参照可能な事例として、秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム運営農家(以下、グリーン・ツーリズムを「GT」、グリーン・ツーリズム運営農家を「GT農家」とする)を取り上げ、他者とかかわりを肯定的に意義付けるための価値意識を探っていく。

筆者の研究全体では、当地のGT農家7軒・13名を調査の対象としており、牲川(2018)では、A1・A2夫妻について分析した。そして本稿では、B1の意識を分析対象とする。このように一人ひとりの意識を個別具体的に描きだしていくことで、読者がより共感的に参照できる形での事例の蓄積をめざしている。結論を先取りすれば、B1一人の他者受け入れ意識の中にも重層性があり、様々な提言が豊かに含まれている。読者は、こうした事例の誰かに、あるいはそのどこかに自らの共通性、参照可能な要素を見出しようと思われる。

1 これまでも日本で参照されてきたが、その参照の仕方は不適切であり(牲川、印刷中)、また欧州評議会の教育政策理念それ自体にも問題はあ

2. 調査の概要

2.1 調査地

まず、秋田県仙北市西木町と当地でのGTの運営史について概説する。

秋田県仙北市は、秋田県の南北で言えば中央、東西ではもっとも東に位置し、仙北市は田沢湖町・角館町・西木町という三つの地区からなる。その中でも西木町は農業を主要産業としてきた地域である。この西木町では1970年代終わり頃から、地元の劇団わらび座²による修学旅行受け入れ事業をきっかけに、日本国内都市部在住の子どもを中心に農業体験希望者を受け入れてきた。日本政府が「グリーン・ツーリズム」という用語を使い始めたのは1992年のことで(井上、2011、p.3)、農業や農家宿泊体験を内容とする一種の観光の形態を指している。西木町はこうした観光スタイルが流行する以前から、受け入れを行ってきたという歴史をもつ。

西木町のGT農家は農業を主な生計の糧としており、GTは余暇の楽しみの一つという位置づけである。受け入れを担っている世代を含む多世代が同居しており、その自宅内または自宅と同じ敷地内にある離れで受け入れを行っている。GT農家は、農業に携わりながら、大きな収益を期待することなく、家族と暮らすごくプライベートな空間に様々な見知らぬ他者を招き入れてきた。

この西木町のGT農家が初めて外国人団体を受け入れたのは、筆者が立案した秋田県内の外国人留学生対象農家民泊プログラム(以下「留学生プログラム」)においてであり、2009年のことだった。参加したGT農家で、海外生活や高度な外国語学習の経験をもつ人はほぼ皆無だったが、この留学生プログラムが始まると、受け入れ側も含め参加者から高い満足感を得たと評価された(牲川、

2014、pp.63-69)。そして、現在まで継続されるとともに、2012年からは他の外国人団体も多数受け入れるようになった。そうした受け入れにおいては、媒介語がなく意思疎通が難しいといった問題もあったが、視覚情報や電子機器の利用といった方略により解決を図ってきたことが明らかになっている(牲川、2013b)。

外国人との接触経験が決して豊富とは言えず、また媒介語となりうる外国語の学習経験ももたないGT農家が、なぜ外国人と相互に満足感を与えあう受け入れを続けることができるのだろうか。本稿では受け入れの継続を支える価値意識を探るべく、もっとも長く受け入れを続けてきたB家のB1を取り上げる。

2.2 調査対象・方法

2.2.1 調査対象

B家のGT開始のきっかけは、劇団わらび座から依頼があり、中学生の農業体験を受け入れたことである。こうして1980年前後から、都市部の子どもを中心に受け入れを始めたのち、自宅敷地内に離れを建て、1996年に秋田県内で初の農家民宿を開業した。B1はこの民宿を運営するとともに、GTに関する地域の研究会も立ち上げ長くその会長を務めた。2012年の1回目のインタビュー調査時点で秋田県内のGT農家が参加するNPO法人の役職に就き、2014年の2回目の調査までに、男女共同参画に関する秋田県および内閣府の賞を受賞するなど、地元にとどまらず、秋田県の、特に女性によるGT運営を先導する立場を担ってきた。夫であるB2は農業のほか職人としての仕事も長く続けており、GT運営においては補助的な役割である。B家の活動全体においてGTは大きな意味をもってきたが、主な収入源は農業とB2の職人としての収入である。

2 秋田県仙北市田沢湖に本拠地を置く劇団。演劇などの芸術活動のほか、長年にわたり都会の子どもたちに農業やパフォーマンスを体験させるプログラムを運営している(及川、1987)。

インタビュー調査の結果を分析したところ、B2がGTでの他者の受け入れに言及した箇所はなかったため³、本稿ではB家のGTの主たる運営者でありかつ本稿の目的に適った発言のあったB1のみを分析対象とする。1回目の調査時点で、B1は60歳代半ばであった。

2.2.2 調査方法

B1に対するインタビュー調査は、3回、計3時間40分実施した。内訳は、1回目(2012年9月)に1時間10分(35分後から長年の常連客が同席)、2回目(2014年8月)に1時間30分(後半の45分はB2が同席)、3回目(2016年8月)に1時間である。受け入れ継続の理由を共通テーマとしつつ、各回に中心的な課題を設定し、調査の中で関連する事柄をさらに詳細に尋ねていった。各回の中心課題は、1回目は外国人以外も含め受け入れ時に起こったトラブルと解決方法、方法を使った理由、2回目は国内外を含めた移動経験および他者との接触経験、3回目は1、2回目の調査で不明瞭だった事柄の確認であった。

筆者とB1とのかかわりは、筆者が留学生プログラムを計画していた2008年に遡る。B1が当地のGT研究会のリーダーであったことからその自宅を訪れ、西木町での実施を打診し快諾を得た。その後、2013年まで筆者はこのプログラムに企画運営責任者、引率者として参加しており、1回目の調査までにB家で1度、1泊2日の農家民泊を体験していた。留学生プログラムは、この1泊2日の農家民泊体験と全体での経験共有会、その1か月後の日帰りの全体交流会から構成されており、全体で集まる際には留学生の様子などについてB1としばしば情報交換を行っていた。2回目の調査までの間には、毎年の留学生プログラムに加え、別の体験プログラムも1度西木町で行った。その

際にもB1と顔を合わしている。以上のような交流の積み重ねにより、インタビュー調査においては、率直に語ってもらえる関係が築かれていたと考えている。

3. 分析方法

3.1 分析の観点

本稿では、B1がGTで受け入れる他者をどのようにとらえ、受け入れにどのような意義を見出してきたかについて、その意識のあり方を詳らかにしていく。

本研究でいう他者とは、「自分または自分たちにとって何らかの異質性をもつと認識される人または人々」である。日本の在住外国人の増加という研究の背景に基づけば、外国人に対する意識のみを調査・分析の対象とすることもありえよう。しかし、外国人に限定することはそのカテゴリーを本質化することにつながる。社会心理学では、人は自分が属する内集団と属さない外集団という区分が設定されるだけで、外集団よりも内集団に好意的な反応をする傾向があり、内・外を特定の境界で分けるというカテゴリー化そのものが、偏見・差別を生みだしうるという指摘もなされている(浅井、2012、pp.104-105、大江、2018、pp.15-18)。外国人への意識のみを対象とすることは、調査と分析の両方を通じて、外国人というカテゴリーを本質化し、日本人と外国人との間に差別・被差別の関係を生み出しかねないという問題をもつ。

また、日本社会では、家族以外の人間とのかかわり自体が希薄であるというデータもある(OECD、2005、pp.82-83)。本稿で取り上げる秋田県仙北市西木町のGT農家のほとんどは、外国人を受け入れる以前から日本国内の子どもたちを受け入れてきた。この受け入れは、行政の提案や公的

3 調査の依頼に際して夫妻の同席を求めることはしておらず、B2は個人史を尋ねた2回目の調査にのみ参加したことによる。

補助金をきっかけとしたものではなく、きわめて自発的に始められており、営利を目的ともしない。外国人であるか否かにかかわらず他人のかかわりあいに積極的でない日本社会においては、行政主導でもなく営利目的でもない形で、家族以外の人間を自宅に招き入れ農業や宿泊を体験させるという選択そのものが希少だと考えられる。

以上の理由から、本稿では、自分にとって異質と感じられる他者を受け入れてきた、その営みの延長上に外国人の受け入れもあったと仮定し、仮定の検証も含め、B1が他者の受け入れをどのようにとらえなぜ継続してきたのか、他者受け入れの意識のあり方を総体としてとらえることをめざす。これにより、海外生活経験や高度な外国語学習経験をもたない社会人層にとって、この点で自らと変わらない条件でありながら、他者と積極的にかかわっていくためにはいかなる意識をもてばよいのか、その一事例を示していきたい。

3.2 分析・提示方法

分析データは、音声記録を秋田地域出身者が文字化したものを筆者が確認し修正したものである。分析方法は、GTによる他者受け入れに言及した箇所をすべて抽出し、その記述単位を内容の特徴ごとに分類したのち、記述単位間の関係を検討した。本稿では分析結果として、各特徴の典型例を前後の文脈も含めて取り上げ、B1の他者に対する意識の全容を描き出す。

データからの引用に際しては大意の把握を重視し、会話の流れに影響しなかったと判断されるフィラーや言いよどみ、質問者である筆者(I)の挿入的な発言や相槌などは削除する。また、まとまった意味内容をもつ発言で、分析結果に関係しないと判断されたものについては「(略)」として省略し、分析結果に関係するが要約可能と判断されたものについては「(略—※)」(※部分に要約が入る)として内容がわかる形で記述する。秋田のこ

とばやその他説明が必要な箇所については「(=※)」(※部分に説明が入る)で説明し、聞き取りができなかった箇所については「XXX」、登場人物の特定につながる情報については「Y」、笑いながらの発言は「(笑)」で示す。

4. B1はなぜ外国人の受け入れを続けてきたのか

ここではまず、外国人や留学生の受け入れに対するB1の意識を記述する。B1は、2009年の外国人団体受入開始以前に、すでに約30年の各種団体・個人の受け入れ歴をもっていた。その豊かな経験の中で、外国人を受け入れることにはいかなる意義が見出されているのだろうか。

4.1 媒介語の不在

2009年に筆者の企画で開始した留学生プログラムにおいて、参加留学生の日本語能力は一様でなく、日本語では意思疎通しがたい者もいた。GT農家で高等教育レベルの外国語学習経験をもつものはほぼ皆無だったため、プログラムを企画する段階で媒介語の不在について懸念していた。筆者は、グループの中に日本語能力が一定以上の留学生も入れるなど調整を図ったが、それでもなお、意思疎通の問題は残ると予想された。しかしプログラムの開始からインタビュー調査時まで、媒介語の不在が明確な問題点として訴えられることは、農家、留学生いずれからもなかった。ことばでの意思疎通が困難であるということを、B1はどのように認識していたのだろうか。

2012年の1回目のインタビュー調査では、序盤で留学生プログラムの評判がよいことを筆者が述べ、B1も留学生が来てくれてうれしい、引き受けたからにはなんとかするので苦はないといったやりとりがあった。留学生プログラムが順調に続いているというこのやりとりを受け、筆者は自身の意見として、大学での留学生対応においては、

外国語運用能力より意思疎通をするための関係作りのほうが大切だと思っていると述べたところ、B1は次のように語った。

だって無理だよ。10人来て7か国だっけよ最初。その国のことば覚える無理無理(笑)。だから、無理だから、結局ことば通じなくてもこう、通じあえるっていう自信もついであるから。ことばだけではいくら英語しゃべれても、通じねえもんは通じねえ、心がな。でもしゃべれなくても心は通じるなって思った。(2012年)

B1は、それぞれの出身地のことばを覚えるのは無理だと割り切りつつ、2009年以降の受け入れを通じ、ことばが通じずとも心は通じるという自信を得てきている。

上の発言のあと、筆者がことばが通じなくとも心が通じるというそこが不思議だとコメントすると、B1は「不思議だな」「猫がもしんね」と、筆者にとって即座には理解できない返答をした。続いてB1は、中国人団体を受け入れた際、ことばでの意思疎通はまったく不可能だったが、B1の飼っている猫が中国人の一人に抱かれて離れず、「猫だけが通じるのか、うらやましいなあって見だった」、そして、団体とのお別れ会の時、ビデオの録画映像を公開しあったのだが、その中で猫とその中国人との仲のいいところがたくさん映っていた、「絶対これなあ、ことば通じるか通じねがっていうよりも先に、やっぱり一生懸命やるがらでねえの」と語った。中国人訪問者と猫とが媒介語不在でも関係を作っていることに、自分自身の経験を重ねつつ、一生懸命やれば不思議と心は通じるものだという確かな認識に至っている。

また同じ1回目の調査において、ことばでの意思疎通ができないアメリカ人団体の受け入れについても、通訳も介さず、互いに目を見ながら身振り手振りで意思疎通を図った経験が「すごく新鮮

だった」、受け入れの最後にGT農家で集まり反省会をした際には、「ことば通じねえがらこう一生懸命やるせいなのか、すごいなんかあたしたちもこうやったあっていう、そういう気持ちあるし、うれしかったって気持ちも強ええ」という話が出たと語った。

B1にとって、お互いに意思疎通を図るための媒介語がないという状況は、外国人の受け入れに困難をもたらす要因とはとらえられていない。媒介語の不在は互いの通じ合おうとする意志と方略により乗り越え可能であり、むしろことばが通じずとも心が通じ合えたという実感と自信、新鮮さと達成感をもたらすものとして認識されている。

4.2 外国人受け入れの意義

B1は媒介語を使わない意思疎通の試みを肯定的に評価していた。ここではそのほかに、B1が外国人を受け入れることの意義について語った箇所をみていく。

2012年の1回目の調査の開始部分で、筆者は、留学生プログラムを始めるにあたって事務スタッフからは農作業をわざわざしにいかなくてもよいのではという意見もあったが、実際に来てみると、特に留学生はとても喜んだのでよかったと述べた。これに対しB1は、日本国内の大学生と比べながら、外国人留学生を次のように高く評価した。

一生懸命だよ、留学生。なんだろうな。あの姿ってほんとに日本の大学生にはねえ姿だな。だがらちょっとした大学来いば(=来たら)、留学生の人がた(=人たち)見習うべきだなってわたし言うときある(笑)。その態度っていうか、やっぱり親元離れて外国さ来て暮らしてるっていう、そごに足踏み込んだ態勢が違うでねがなって思うのよ。留学生がた何人も来てくれるってすごいうれしくてね(笑)。(2012年)

親もとを離れ日本に来て暮らすという決心をした、そうした留学生の背景を踏まえた上で、B1は、日本人大学生よりも優れているという評価を下している。そこで筆者は、そうはいっても留学生受け入れ固有の困難もあるのではないかと何回か問いかけたのだが、4.1で取り上げた猫のエピソードや、留学生は引率教員ともどもよく仕事をするといった肯定的評価が語られるばかりだった。そのため、では外国人に限らずこれまでの受け入れで大変だったことはなかったのかと尋ねたところ、B1は、最近、日本の大学生が事前連絡なしに大幅に遅刻した、その際雷を落とすとともに、留学生はまったく違うと言ってやったというエピソードを語った。それに対し筆者が、留学生のほうがことばはできないがむしろしっかりしているという印象があるかと聞くと、B1は次のように返答した。

うん。そしてあどまだ、農家にしても、何かちょっとあれしても、ああことば通じね、というのと、外国のかただからなという、許せる気持ちもあるのかな。そこまでもってるのかな。でもまだ苦情は聞いたことね。おもしれって話ばかり。(2012年)

B1は、留学生のほうが絶対的に優れていると評価しているわけではない。GT農家は、ことばができないから、外国人だからということで、たとえ問題があっても許せる気持ちもあるのかと、GT農家が外国人を最良目に見ている可能性を述べている。しかし直後に、そこまで特別視しているのだろうかという疑問も示し、最終的には、他の農家から苦情はなくおもしろいという話ばかりだとまとめている。問題が起こっても外国人だからということで許容しているのかもしれないと、外国人への評価を相対化しつつ、だとしても問題は上がってきておらず、おもしろい経験だと意義

付けている。

筆者は同じ2012年の調査終盤で、こうした受け入れが成功するのは外国語が話せるかどうか、海外に行った経験があるかどうかとは関係ないと考えているという持論を述べた。それに対しB1は、「みんな外国行った気分になってるびょうの(=気分になっていると思う)。外国の人がた(=人たち)くれば」と、外国人が来ることにより、農家は外国に行った気分になっているのではないかと返した。そして続けて、4.1で言及したアメリカ人団体について、その受け入れが終わった最後の日、GT農家の話し方が変わっていたというエピソードを次のように語った。

だっておかしがった。あのY(=団体名)終わったあとの、一番最後の日。話し口がなんかよ、いっつもと違うのな。(略)農家のばあちゃんかたがね英語べろって出てくればよ、単語出てくれば、はーはっはっはっは。インチキ英語よ(笑)。でちょっとこうしゃべ方もよアクセント違ったりよ。(略)おかしかった(笑)。おかしがったあとき。でしゃべってる本人もあーと思ったりよ。(2012年)

B1はアメリカ人とのやりとりを身振り手振りで乗り越えたことを新鮮で達成感があつた経験ととらえていた(4.1)。それとともに、自分たちが乗り越えの過程で既知の英語を使い、受け入れを終えた直後に思わず英語口調になったことをおもしろがっている。

またB1にとっては、多様な国の出身者が次々と地域を訪れること自体がおもしろい。2014年の2回目の調査は、過去の留学生プログラムの報告書を見せ、経験を思いだしてもらうことからインタビューを始めた。その報告書の参加者アンケートの結果を見た後、B1は最近の外国人受け入れについて、「でもなんかおもしろいよ。今度タイ

からも来るとかって。なんかいろいろ。インドネシアも。外国の人がた(=人たちが)いっぱい入ってくるんだ」と話した。仙北市では2009年に留学生プログラムが始まり、2012年からは他の外国人団体の農業体験も受け入れるようになった。東アジアからの修学旅行やその準備のための視察団、行政を介しての各国代表団など、出身も年齢も多様な人々が滞在するようになっていた。B1にとってそうした訪問そのものがおもしろい。

この2回目の調査はGT受け入れまでの移動経験など個人史を確認することを主な目的としていたのだが、その中で筆者から、市のブログに掲載されていたB1の活躍の話を出し、その流れで同じブログにあった、最近のカンボジア大学生の受け入れについて感想を尋ねた。B1は、「ことばでできねんだけど、おもしろかった」「結構気さくなんだよな。だからすごい楽だった。身振り手振りで」と、ことばでやりとりできなくとも、相手の人柄が気さくだったために楽であり、おもしろかったと感想を述べた。そして、その中に将来コックになりたいという学生がいたということで、野菜などをカットするためのステンレスの型を一つあげて使い方を教えたら、カンボジアにはないということ喜んで、自由に料理作りを任せたら、きゅうりの油炒めというB1が想像できなかった料理を「果たして美味しく作るっけ」、塩コショウと少量の豚肉でバランスよく「食べやすく作ったっけ」と驚き交じりで語った。この話に続き、筆者とB1は、次のようにやりとりした。

I: 男の人ですよ、みんな。

B1: うん。

I: 男でも料理するんですね。

B1: するする。

I: へー。

B1: 結構な、あの、今はこう男女かまわね。あの、なんて言う、隔たりなくてやっば

り。同じY(=首都圏の中学校)でも、男の子が料理の仕事XXXやりでって人も来るがら。

I: (略—それはYという学校が特別なのではないかなかなか、やらせないうちもいっぱいありますよまだ。(略)男の子は、みたいな。

B1: あー、考えられXXX。うちの男性一生懸命やってら。

筆者(I)は、B1が受け入れたカンボジアの大学生はみな男性か、「男でも料理するんですね」とコメントしており、このコメントに対するB1の答えとして「カンボジアでは男も料理するようだ」といったカンボジアの特徴としての語りが予想される。しかしB1は、今は男女関係ない、国内の中学生にも料理の仕事をしたいという男子がおり、また自分の家の男性も料理すると返した。

ここまでの外国人受け入れに関するB1の語りが示すのは、B1は、受け入れた対象が外国人であること、ある国の出身者であることに対しことさらに重い意義付けはしていないということである。筆者が、外国語能力や海外生活が外国人受け入れの成功の必要条件ではないと考えていると話した際には、外国人を受け入れることで外国に行った気分になっているのではないかと答え、また受け入れ後にGT農家が互いに英語口調で話したことをおもしろがってはいた。一方でB1は、受け入れた外国人の特徴を、その出身国と結びつけることはしていない。外国人の受け入れについて、全体としておもしろいと述べることはしばしばあるものの、特定の国民国家の異文化性を強調することも、その気づきを受け入れの意義として語ることもない。

4.3 外国人受け入れの困難

そのことは、2014年の2回目の調査で、宗教上

の禁忌への対応を次のように語った箇所からも読み取れる。4.2のカンボジアの大学生受け入れの話が出たあと、筆者がことばができない人が来ることにもう抵抗はないか、いつでも来いという感じかと尋ねたことに続く、一連のやりとりである。

- B1: 来いっていうかなんとかなるっちゃう、
なんとなかったっけなーっていう感覚で
いるから、あんまり深く考えてね。
- I: インドネシアの方を迎えるにあたって、
ハラールフードの講習会もやられたって
聞いて。なんか工夫されるんですか、料
理も。
- B1: いやあ、農家民宿の人がたは、そごまで
なー考えねたってなって人がた(=そこ
まで考えなくてもなという人たち)だから
(笑)。なあに、自分で食べられねば、
それちゃんとよせて食べるからよ。そこ
まで気にしねたってな。やっぱりホテル
とか何かだったらよ、気にするかもしれ
ねえけど。(略—他者のGT農家とも、よけ
てくれるだろうと話していた。だからそ
れほど苦にはならない、という話)まし
ては、留学生来て、そういう話こう事
前に聞いて、そういう人がたと接して
きてるから。今始まったことでねがら。
- I: だいふ慣れてきたっていうところも、
- B1: うん、こんなもんだっけなっちゃう感覚
でいるが。(2014年)

インドネシアからの団体の受け入れが決まったため、仙北市はGT農家やホテルなどの食事提供予定者を対象に、ハラールフードの講習会を実施した。それを受講したB1は、講習会の内容について、GT農家はそこまで考えなくてもという人々であり、訪問者自身がよけてくれるだろう、だから苦にならないと述べている。そして、これまで

留学生を受け入れる中でハラールフードを食べる学生とも接してきており、こんなもんだろうという感覚をもっているとも説明した。

留学生のプログラムでは、事前に参加者に食べられないものを確認し農家に伝えていた。理由の申し出までは求めていなかったが、アレルギーや菜食主義、宗教上の禁忌などの理由があったと考えられる。各農家は連絡のあった食材を使わないなど工夫はしていたものの、宗教上の禁忌に完全に沿った食事を用意し大変だったというような話は筆者も聞いたことがなかった。留学生が自己判断でその場で確認し、必要に応じて食材をよけたり一品食べなかったりということをしてきたようだ。この対応方法でなんとなかったという感覚を得てきていたため、B1はこれからはなんとなかると考えている。

B1は、外国人受け入れの意義については「おっかしがった」「なんかおもしろい」と語り、外国人受け入れを特に困難にするとされる要素については「深く考え」ず「こんなもんだ」と感じていると話した。意義にしても難しさにしても、外国人受け入れに起因する重大事とはとらえていない。

4.1から4.3の語りからは、これまでの外国人受け入れ経験の蓄積から、媒介語の不在や食習慣の違いを困難や苦ととらえず、受け入れを肯定的にとらえてきた様子がうかがえる。いったん受け入れはじめ経験を積んでいけば、自信を得てさらに受け入れを楽しめるようになるというこのプロセスは十分に理解できる。とはいえ、国内団体の受け入れを中心に行ってきたGT農家が、外国人の受け入れを最初に始めるとき、そこには相当な覚悟と跳躍が必要だったのでないか。

4.4 他者受け入れの困難と乗り越え

この問いに対する答えは、B1がどのような対象者に特に受け入れの難しさを感じてきたのか、また外国人を含めたGT全般の受け入れをどのよ

うな覚悟と実践で続けてきたのかという語りの中に見つけることができる。

2回目の調査では、GT継続の個人史的背景を探るべく、学校教育経験などを尋ねていったが、途中で最近の受け入れの話になり、カンボジアの大学生が気さくで受け入れも楽だったということや、ハラールフードのこともこれまでの経験があるからあまり気にしないといったことが語られた(4.2、4.3)。経験の積み重ねという話題を受け、筆者は、ほかのGT農家も、アメリカの高校生の受け入れが高校生であり何も言ってくれず大変だったけれども、それを乗り越えたから、ほかの外国人団体の受け入れも大丈夫になったという話をしていて、と紹介した。下はそれに対するB1の反応と筆者とのやりとりである。

B1: だって、高校生って一番難しもんな。

I: そうですか。

B1: うん。やっぱりこうずーっと引き受けてきて、高校生一番おもしろみなっていうか、一番難しい。

I: えー。中学生じゃないんだ。なんかあたし、中学生が思春期っぽいなって。

B1: 中学生はまだ子どもながら。高校生ってちょっとこう大人の仲間入り。でも、その大人の意味が、わからないような感じじゃないのかな。だがら、高校生自身ももしかして、こういう知らないどころさ来て、どう振る舞ったらいいのかもまだわからないよな気がする。(略—大学生はアルバイト経験なども経て、もう大人だ、という話)やっぱり、高校生一番難しい。(2014年)

ここでの高校生とは外国人の高校生のみを指しているわけではない。筆者は自身の記憶から中学生がもっとも扱いが難しいのではと考えていた

が、B1はこれまで30年以上の受け入れを続けてきた実感として、高校生が大人になりかけで、農家に来ておもしろまい方がわからない様子であり、受け入れも一番おもしろみがなく難しいと述べている。そして続けて、小学生についての別種の難しさを語った。

B1: あと小学生は宇宙人みでやったもんでな。

I: 宇宙人(笑)。

B1: うん、ことばの通じる宇宙人みでなもんでよ。あれなんと動くがわがんねんだ。あははは。どっち離れていくんだがよ。

I: わーかわいいっていうふうに。

S: うん、かわいいけどもね。なんというがな。宇宙人だと思ったら、あたしは。(略)中学生はある程度、なにそれしうなってば、動くんだよ。でも小学生は、そさポンと置けば、花火線香みたいに、どっちゃ飛んでいくがわかんねんだ(笑)。(略)自分の思うほうさ散らばるがら。(略—小学生は一緒にいるように常に気を付けていないと何をやらすかわらない、という話)どうもわたしやってきてそんた気してるな。(2014年)

B1にとって小学生は、どこに向かって動いていくかわからない、「ことばの通じる宇宙人」としてとらえられている。予想不可能な動きをする小学生は、たとえことばでやりとりができたとしても、常に注意が必要だという点で難しい存在である。

B1は長年の経験から、外国人であること、ことばが通じないこと以上に、特定の年齢層(高校生・小学生)であることを、受け入れを難しくする大きな要因ととらえている。

しかし実際に外国人を受け入れるまでは、比較対象もなく、外国人固有の困難を予想して不安も

もったのではないか。1回目の調査は、留学生とGT農家両方から留学生プログラムの評判がよいという話から始めたのだが、筆者は、そうはいっても受け入れを始める際には心配もあったのではないか、報告書でも受け入れ前は心配もあったという農家の声も書かれていたがと尋ねたところ、B1は次のように応じた。

だって来るんだもの、しょうがねえった。うん、て言ってしまったんだもの。自分たちがな、受けるがって言ったとき、うん受けるって言ったんだがら、あどは自分達の責任だがら。心配しょうがどうしょうが、うんて言ったあんたの責任だべっていうがら。せば(=そうすれば)あどは自分たちでほら、受けるって、うんて言ったんだがら、なんとかしてやりとおさねね(=やりとおさなければ)って。そういう考えだから。あえて苦にならねっていうが。それが当たり前だろうって感じだから。(2012年)

留学生プログラムを始める際、筆者は当時GT農家の代表であったB1に相談し、受け入れを承諾してもらった。その後、B1は各農家に受け入れの可否を確認し、実際の受け入れが始まった。上の語りからわかるのは、初めての外国人団体の受け入れがたとえ心配であったとしても、いったん引き受けた以上は各農家に責任があり、なんとかやり通すべきだ、それが当たり前だから苦にならない、という論理である。さらにこの話のあと、B1は、GT農家に急なことが起これば仲間で助けてくれるという思いもあるから、農家は引き受けているのだと思うと補足し、自分自身も国内の中学生の受け入れ時に舅が倒れ、急に別の農家に子どもたちを引き受けてもらった、「だがらなんとかなるもんだ」と話した。受け入れに臨むB1の基本的なスタンスは、承諾したからにはやり通すことが当たり前で、苦にはならないというもの

である。同時に、GT農家が受け入れを承諾する背景に、不可避の問題が起これば仲間でカバーしあってきたという実践の歴史があったことが読み取れる。

以上の4章の分析から、外国人受け入れ以前の多様な他者受け入れ経験が、外国人団体の受け入れを承諾し、承諾したからにはなんとかするという意志をもつことや、外国人というカテゴリーを相対化し困難も含めおもしろさとして受けとめることを可能にしたと考えることができる。

5. B1はなぜ他者の受け入れを続けてきたのか

外国人受け入れに困難を認めていないとはいえ、B1は、高校生が一番難しい、小学生はことばが通じる宇宙人だと語っていた。であれば、B1はなぜそうした難しさ、理解しがたさもある他者の受け入れを続けてきたのだろうか。ここでは、外国人に限らずGTで他者を受け入れることの意義を語った箇所を取り上げ、自分にとって異質な存在とかかわりをもつことにB1がどのような意義を見出してきたのかを検討する。

5.1 他者の存在

1回目の調査の始まりで、B1は留学生を日本の大学生が見習うべき者と評価し、留学生が何人も来てくれるのがとてもうれしいと話していた(4.2)。これを受けて、筆者から、当初は秋田県内のほかの地域でも実施しようかと考えていたがずっとここがいいと思うようになった、ほかの地域となんとなく違うような気がするという話をした。するとB1は、迎え入れ方が違うのではないかと、この地域の人々は、「わあ来てくれる、ありがとう。ここに来てくれるありがとうっていう、そういう感じで。あとは代金なんか、あとで貰えばほう、っていうぐらいなんだよな」(2012年)と語った。B1によれば、GT農家は、地域外から

人が訪れてくれること自体がありがたく、そうした人々に会えることをただうれishiと感じているのだという。

これまでの受け入れで大変だったことを尋ねた際、日本の大学生団体が遅刻してきた話が出されたが(4.2)、その団体の訪問目的は地域活性化の提案であり、B1宅に来た際にも農村観光についてどう思うという質問があったということだった。これに関連してB1は次のように話した。

観光なんて考えてねえね。ただ、人が来て、いろんなこと教わったりよ。お互いに心のふれあいしながらよやれるって、それ楽しみにしてやってるから。だから百姓屋だってもう、その日一生懸命働かねえ人(=働かなければならない人)なんか受けたりしねよ。受ける人がたは、たとえ学生来て2日その日仕事しねくたって、なにもまだ日にちあらあなって人がたがやってるから(笑)。忙しって言わねのよ(笑)。むしろ仕事してってけで(=仕事していつてくれて)、ほーなんてぐがら(笑)。(2012年)

筆者は本稿の中で、西木町での農業体験事業をグリーン・ツーリズム(GT)と呼んできた。しかしB1自身には観光を営んでいるという意識はない。引用からは仕事のペースとしても余裕がある中での受け入れであり、ただ人がやってきて、結果として何か教わったり心のふれあいがある、それをそのままに楽しんでいる様子が読み取れる。

5.2 緊張感とゆとり

1回目の調査で受け入れ時のトラブル解決方略を知りたかった筆者は、普段の農作業も忙しいのに、留学生プログラムでは1日目の朝から翌日の昼過ぎまで滞在することになり大変ではないか、また、ほかの人が家に入ってくることに緊張することもあるのではないかと尋ねた。B1の答えは、

次のようなものだった。

だって、その緊張がよくてやってるんでねの。だからあたし始めるときな、いっつもだらーっとしてると、(略)水道のホースに垢っていかゴミ溜まるね。(略)でもそれがきちっとおさめてて、ぱっと離せばそれ抜けてくんだよ。それと同じでたまに緊張あればいいのよってのよ(笑)。それぐらいの考えでやってるから、学生さんがた来て忙しいっていうのは。(略)いや確かに続けば忙しいなって普通にはしゃべるんだけど、どうしようもない忙しさ、嫌だ(=嫌な)忙しさじゃねんだよな。ありがたい忙しさだから。だって嫌だ人は受けねおん(=受けないもん)(笑)。(2012年)

B1にとってGTでの受け入れは、ホースに水をためて勢いよく出したときに垢が流れていくように、普段の日常生活を浄化する緊張感ととらえられている。そのためそうした緊張感についての説明が、新たにGTを始める人に対する誘いのことばとなっている。また、忙しさについても感謝できる忙しさであり、その背景には嫌な相手であれば受け入れをしないという自身での選択が可能であることも影響している。

また5.1では仕事の余裕があるから受け入れているということだったが、2016年の3回目の調査では逆に、受け入れをしていることで余裕が生まれるとする発言もあった。2回目の調査はGTの継続を可能にしている個人史的背景を尋ねるために実施し、3回目は2回目の調査で不明瞭だった部分を確認すべく行った。その中で家族構成の話題が出た際、B1は、GT農家の夫は封建的ではないという共通点がある、昔のように夫が厳しいとGTはできないが、GTをしていない農家の男性の中には、忙しいときによく他人の相手をするなどという人もいたと語り、さらに次のように続けた。

でもなんていうかな、我々からすればよ。毎日のこの百姓仕事って、1時間2時間したってよ、どうってことねえねかって感じ(笑)。それよりもいろんな話っこ聞いたりよ、こうしていた方が、自分的に裕福というかな、ゆとりが出てきていいんでねえのって思うんだけど、そうでない人がたもいるからよ。(略)自分の労働イコールお金っていう考えている人もいるわけ。(2016年)

時間・経済的に余裕があるから受け入れができると同時に、いろいろな話を聞けるような受け入れをしているからこそゆとりが生まれる。B1のことばは、あえて自分にとって異質な他者とかかわりをもつことが、日常をゆとりある生活へと変えていく可能性を示している。

次に、B1がGTの意義をより具体的に語った箇所を取り上げる。2回目の調査で、カンボジア大学生の受け入れの話があり、その中の一人が作ってくれたキュウリの炒め物がおいしかったなど、料理の話題が出た(4.2)。筆者はこの調査の直前まで、B1宅とは別の農家で自分の大学のゼミ生と合宿を行っており、そこでは主に妻が食事を用意していたことから、GTにおいてはやはり妻が一番大変なのではないかと思ったと話した。それに対し、B1は夫が少し手伝ってくれるととても楽だとコメントしたが、筆者が、それでも中心は妻で、妻が大変さを苦に思わず、楽しくできないと続かないのではと返したところ、B1はGTの意義を次のように語った。

やっぱりこれ大変だと思えばやらいねあんだ(=思えばできないものだ)。でも作っておいしって言われてもらって、(略)普通に生活してれば旦那なんかおいしいなんて言ってくれるわけねえねん。(略)それがほめられるっていうのが、女性としての生きがい、あたしの場合は

な。やっぱりそこ見られて生きがいに繋がってきた。じゃあこの次、何ごつつおすがなあ(=ごちそうしようかな)、何を作ろがなあっていう、そういう思いめぐらしていくっていうのが、これがまた人生の中でよ、楽しい、あれでねがな。(2014年)

地域のGT農家代表として、この地域の農家はこう考えているという語り方も多いB1だが、ここでは明確に自身にとっての意義を語っている。料理は日常生活の中では当たり前の存在であり、夫から特に評価されるわけではない。しかし受け入れた人々は自分の料理をほめてくれ、それを受けて、では次は何を作ろうかと考える。この一連のプロセスが、B1にとって、女性としての生きがい、楽しみに繋がってきたという。この箇所の少しあとには、4.3で取り上げたハラルフードの話が出てくるのだが、前述したようにB1はこうした宗教上の食物の禁忌についてはあまり気にしていない。おいしいとほめてもらえるよう料理作りを楽しむことがB1にとっての生きがいであり、楽しみが苦しみになることのない範囲内で対応しようという姿勢で、訪問者の特殊性に臨んできたと考えられる。

5.3 幸福な人生

最後に、B1が自身にとっての「幸せ」を語った箇所を取り上げる。3回目の調査の終盤で、筆者はB1に対し、これまでの農家には農業を中心とする生活基盤という豊かさがあり、それにプラスするため外で少し働くといった感覚があったと思う、こうした基盤となる豊かさは今後も続いていくのだろうかと問いかけた。するとB1が若い人には厳しいと思うと答えたので、筆者からそれは米や野菜の値段が下がったことから来るのかとさらに尋ねた。筆者は、農業をめぐる構造的な変化が、他者を楽しみとして受け入れるというGT農

家の意識のあり方を変えてしまうのではないかと危惧していたからである。これに対しB1は、確かに米・野菜の値段が下がったこともあるが、若い人には子育てや生活をしなければ、いいものを着たいといった多くの欲求があり、目先のお金を求めてうちを出ていっている、年齢を重ねないと少ないお金で食べていくことの豊かさには気づかないのではないか、と答えた。そしてさらに、自分たちはここにいてもいろいろな人に会える、また自分でもいろいろなところを歩き回ってきたからもう欲求も少ないとして、自らの現状を次のように語った。

その中にいて、ちょこちょこっと種を買ったり、友だちとやりとりしながら、こうして野菜食べて、お客さんにごちそうしておいしいと言われてもらってるって、すごい幸せなことなんだ。それに気がつくまでの、歳ってあるんでねえかな。だから、今こういう生活できるってすごいありがたいなー、幸せだなーって思うなあ。だから畑仕事なんてなんも苦労だと思わねえもん。(2016年)

B1は、現状を「幸せ」「すごいありがたい」と表現する。この幸せな状態は、ここにいながらいろいろな人と会える、ここ以外のいろいろなところを歩く、少し種を買う、友だちとやりとりする、作った野菜を食べる、客に料理をふるまいおいしいと言われる、そうした多様な要素から成り立っている。経済的に非常に豊かというわけではないが、地域では農業を営み親しい友人がおり、ときに地域外からも人が訪れ、料理を評価してもらえるという生きがいがある、また自分で多くの他地域を訪れても来た。こうしたB1の現状認識は、年齢をただ重ねてきたからではなく、様々な事柄に対し引き受けたからにはなんとかするという意識で臨み、実際になんとかしてきたという行為の

積み重ねによって築かれてきたものだろう。

B1にとって、「ありがたい」「幸せ」を形作る要素の一つがGTでやってくる他者である。GTで他者が来て会えること自体がありがたく、その存在は日常に緊張感とゆとりをもたらしてくれる。たとえば外国人と身振り手振りでやりとりすることや、訪問者から料理をほめてもらうといったことが生きがいとなる。そしてB1にはこうしたGTで受け入れる他者の存在とともに、地域内の人間関係や日常的な楽しみもある。これらの要素すべてが、B1の幸せで豊かな人生を織りなしているのである。

6. 結論

外国人を受け入れることに対するB1の意識は以下のように総括できる。

まずB1にとって、意思疎通を図るための媒介語がない状況は、困難をもたらす要因としてではなく、通じ合おうとする意志と方略により乗り越え可能であり、むしろ心が通じ合えたという実感と自信、新鮮さと達成感をもたらすものとして認識されている。

外国人受け入れを特に困難にするとされるその他の要素についても「深く考え」ず「こんなものだ」と感じているとのことであり、外国人受け入れは「おっかしがった」「なんかおもしろい」ものにとらえている。こうした意識は、外国人の受け入れ経験の積み重ねによって形成されてきたものであり、受け入れ開始当初は相当な覚悟が必要だったと想像された。しかし、長年の受け入れ経験の中でB1が特に難しさを感じてきたのは、高校生、小学生に対してであり、その認識は外国人受け入れを始めたあとも変わっていなかった。また、初めての外国人受け入れに対し多少の心配はあったとしても、引き受けたからには何とかなる、何とかするという楽観と責任感、また何かあっても

GT農家同士で乗り越えられるという自信ももっていた。

筆者は留学生プログラムの運営者としてB1とかわかってきており、当初の問題関心も海外生活や外国語教育の経験がないGT農家がなぜ外国人の受け入れを成功させられるのかにあった。そのため、筆者は幾度も外国人の受け入れの難しさを尋ねており、4.1から4.3で見たようにB1も、外国人や留学生についてしばしば言及している。しかしそれらを分析すると、外国人の受け入れに固有の苦労は語られておらず、外国人の受け入れの意義についても、このように特別なよさがあるといった語りはあまり見られない。B1は、留学生の態度を高く評価しており、1回目の調査時には、媒介語を使わずに意思疎通したことや、受け入れ後に英語口調に変わったことをおもしろいと述べてはいた。しかしB1は、留学生の態度が優れているから、媒介語なしでやりとりすることが特におもしろいから、外国人の受け入れを続けているとは述べていない。

そもそもB1は、外国人に限らずGTによる他者の受け入れで、こういうことが得られたからよかった、こういうことを得ていきたいというような、具体的な意義や期待をほとんど語っていない。別稿(牲川、2018)でGT農家A1・A2夫妻の他者認識を取り上げた際、妻のA1は、GTで受け入れる他者を、他地域出身者、自身と異なる職業従事者ととらえ、そうした他者の受け入れにより、自分が住んでいる地域の自然や食べ物、農業の価値を改めて発見し、それをまた新たに来る他者に伝えたいと願っていた。一方夫のA2は、GTで受け入れる他者を、基本的には属性にかかわらず「かわいい」が、一人ひとり異同もあり、受け入れた他者およびその家族との親密な関係づくりを望んでいた。A1は身近な周囲の価値の再発見と伝達、A2は他者との親密なつながりというように、受け入れによって自らが得てきたもの、得たいも

のを表明していた。

それに対しB1は、受け入れが総じておもしろい、他者が来るということ自体がありがたいと語っており、受け入れの意義を具体的に述べたのは、作った料理をほめられるとうれしいというエピソードにおいてのみだった。その理由は、「ただ、人が来て、いろんなこと教わったりよ。お互いに心のふれあいしながらよ、やれるって、それ楽しみにしてやってるから」(5.1)ということばに集約されるだろう。B1にとっては、人が来てくれることそのものが楽しく、何を教わるのか、何を心の中身としてふれあわせるのかは問題ではない。B1は受け入れの可否を自分で決めているのだが、いったん受けたからには、どのような人の受け入れであれ、結果的に得られるものをそのまま楽しもうとしている。

このように受容的に他者の受け入れを続けられる背景には、5.3で考察したように、GTもそこで受け入れる他者も、自らの幸せな人生を織りなす要素の一つと位置付けられていることがある。B1の幸福は、地域内での仕事や友人、地域外への自らの訪問、地域外からの他者の訪問により成り立っている。幸せの多様な構成要素の一つと位置付けているために、GTの他者の受け入れにこそさら具体的な期待や意義を込めることはなく、外国人を含め誰が来ようとも楽しくおもしろい経験と受けとめている。もちろんこれは、B1がなんとかなる、なんとかするという姿勢でことに当たってきたことにより築き上げられた幸福の姿である。アメリカ人と懸命に身振り手振りでやりとりしたことからもわかる通り、この姿勢はGTの受け入れでも一貫している。困難を乗り越えるように行動し、そのことも含め受け入れを楽しんできた。様々な要素からなる幸福な人生のありようが、必ずこれを得たいという明確な期待はもたず、訪れた他者とのやりとりをそのまま楽しむ、そうした受容的な他者認識と受け入れの継続を可

能にしてきたのである。

さて、このB1の他者受け入れに対する意識は、国境を越える人々の移動が日常化する時代に、人々がともに社会を作っていくための基盤となる価値意識だろうか。本稿で考察したB1の意識は、自らにとって異なると感じられる他者とのかかわりが、たとえそれが何をもたらすか予見できなくとも、またそこに多少の困難はあろうとも、おもしろさ、楽しさ、新鮮さ、緊張感、ゆとりといったものをもたらしうることを示している。また、B1には、自らの人生の幸福感が様々な構成要素からなるという意識があり、こうした意識のあり方が、気負いや身構え、過剰な期待をもつことなく、楽しみとしてGTの受け入れを続けることを可能にしてきたのではない。

欧州評議会が提唱する複言語・複文化主義では、言語・文化の多様性に気づき肯定的に受容するための教育が必要とされている(Council of Europe, 2007, pp.17-18, pp.69-70)。民主制文化のための価値意識の教育においても、文化的多様性を価値づけ、「異なる文化的連合をもっている者同士として互いを認識している個人または集団が、相互理解と尊敬に基づき、自分たちの見方をオープンに交換する」(Council of Europe, 2016, p.21)ことが重視されている。

しかしB1の意識を見たとき、確かにB1は多様な出身の外国人の存在をおもしろいととらえているが、文化的多様性に価値を見出したり、他者を異なる文化の体現者として認識しているかといえ、それは定かでない。にもかかわらず、いろいろなことを教わったり心のふれあいが楽しいと述べていたことからすれば、B1と他者との間で「自分たちの見方をオープンに交換する」というやりとりは行われてきたようだ。

B1の場合、欧州評議会の唱える文化観を明示的に学ばなくとも、人々を受け入れていく経験の積み重ねの中で、他者の存在、他者とやりとりす

ることの価値をごく自然に見出していったように思われる。ただし、他者の受け入れはB1自身の意志と行為によって続けられてきたものであり、その継続の背景には、これもB1の意志と行為で築き上げられてきた、人生に対する満ち足りた幸福感があった。

自らにとって異質な他者とのかかわりを、どのようにとらえれば、そこに意義を見出せるのか。B1の意識のあり方は、秋田県仙北市でGTを営む農家、その中のたった一人の事例にすぎない。それでも、自らにとっての異質な他者と出会いつづけていくならば、そうした出会いを幸福の一要素とみなせるほどに、人生を豊かなものにしていくことができる、その可能性を示す一例である。こうした意識をもつに至ったB1の個人史的背景については別稿を用意したい。

付 記

本研究は、JSPS科研費24652098、26870061の助成を受けた。

謝 辞

調査にご協力をいただいたグリーン・ツーリズム西木研究会のみなさま、農家民泊プログラムと関連研究の実施に不可欠な役割を担ってくださった市嶋典子氏(秋田大学)に心から感謝いたします。

参考文献

- 浅井暢子(2012). 偏見低減のための理論と可能性. 加賀美常美代、横田雅弘、坪井健、工藤和宏(編)異文化間教育学会(企画)『多文化社会の偏見・差別—形成のメカニズムと低減のための教育』(pp. 100-124)、明石書店.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Strasbourg: Council of Europe.
- Council of Europe (2007). *From linguistic diversity to plurilingual education: Guide for the development of language education policies in Europe [Main version]*. Strasbourg: Council of

- Europe.
- Council of Europe (2016). *Competences for democratic culture: Living together as equals in culturally diverse democratic societies*. Strasbourg: Council of Europe.
- Council of Europe (2018). *Reference Framework of Competences for Democratic Culture Volume2: Descriptors of competences for democratic culture*. Strasbourg: Council of Europe.
- 藤原奈津子(2019). 外国人集住地域における多文化共生の今とこれから—ブラジルトウン群馬県大泉町を参照例として. 権五定、鷲山恭彦(監)、李修京(編)『多文化共生社会に生きる—グローバル時代の多様性・人権・教育』(pp. 194-199)明石書店.
- 樋口直人(2014). 『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会.
- 井上和衛(2011). 『グリーン・ツーリズム—軌跡と課題』筑波書房.
- OECD (2005). *Society at a Glance: OECD Social Indicators 2005 Edition*. Paris: OECD Publications.
- 及川和男(1987). 『わらび座修学旅行』岩波書店.
- 大江朋子(2018). ステレオタイプと社会的アイデンティティ. 北村英哉、唐沢穰(編)『偏見や差別はなぜ起こる?—心理メカニズムの解明と現象の分析』(pp. 3-19)ちとせプレス.
- 文部科学省(2012). 『平成24年度グローバル人材育成推進事業公募要領』, <http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/download.html>
- 牲川波都季(2013a). 誰が複言語・複文化能力をもつのか『言語文化教育研究』11、134-149.
- 牲川波都季(2013b). 『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法—秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』秋田大学国際交流センター.
- 牲川波都季(2014). 留学生農家民泊活動報告: 農家民泊5年間—秋田県仙北市西木町にて『秋田大学国際交流センター紀要』3、53-82.
- 牲川波都季(2018). グリーン・ツーリズム運営農家A夫妻の他者認識—伝え合いの意志が生まれるところ『言語文化教育研究』16、96-114.
- 牲川波都季(2019). まとめに代えて—政策を動かす日本語教育のために. 牲川波都季(編)、有田佳代子、庵功雄、寺沢拓敬『日本語教育はどこへ向かうのか—移民時代の政策を動かすために』(pp. 145-158)くろしお出版.
- 牲川波都季(印刷中). 日本の外国人政策においてCEFRの能力は発揮できるのか(仮題). 西山教行、大木充(編)『CEFRの理念と現実—現実編 教育現場へのインパクト』くろしお出版.
- 寺沢拓敬(2018). 小学校英語に関する政策的エビデンス—子どもの英語力・態度は向上したのか『関東甲信越英語教育学会誌』32、57-70.
- 吉田文(2015). グローバル人材の育成をめぐる企業と大学とのギャップ—伝統への固執か、グローバル化への適応過程か. 駒井洋(監)、五十嵐泰正、明石純一(編)『「グローバル人材」をめぐる政策と現実』(pp. 206-221)明石書店.